



えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO えど友

第104号
平成30年
(2018)
7-8

江戸東京博物館友の会会報

目次

竹内名誉館長記念講演「西郷隆盛 因縁ばなし」……1~2
第18回定期総会開催/新役員紹介……………3
えど友広小路……………4~5
会員からの投稿「鳥越川に江戸を偲ぶ」/えど友サークルだより/館蔵古文書翻刻だより/友の会めも『えど友』100号記念投稿「東京風景いまむかし」「昭和30年の上野動物園」/「御茶ノ水界限一昭和39年」/「歴史の重み—日本工業倶楽部会館」……………6~7

館蔵古文書翻刻プロジェクトの『馬込家文書 旧記』が刊行…7
見学会「深川・木場・洲崎探訪」……………8
えど東京一景(11) —日本橋と首都高—……………9
江戸博クリップ「思い出の餃子ステーション」……………9
江戸名所図会を歩く…③④
[阿佐谷神明宮から幡ヶ谷不動明王]……………10
えどはく探訪「江戸城と町割り 模型で江戸を体感する」…11
催事案内……………12

江戸東京博物館友の会 平成30年度定期総会 記念講演(平成30年5月24日)

西郷隆盛 因縁ばなし

江戸東京博物館 竹内 誠 名誉館長



西郷と大久保 恩讐を越えて

今月(5月9日)の朝日新聞夕刊にこんな記事が載りました。大河ドラマ「西郷どん」の時代考証も担当している原口泉さんが会長の「西南之役官軍薩軍恩讐を越えての会」が、南洲墓地に建てた慰霊塔の前で、大久保利通の没後140年法要を企画したところ、西郷さんを信奉する東京の市民グループ「敬天愛人フォーラム21」がこれに強く反発、賊軍の汚名を着たまま眠る人々や遺族の思いを考えて欲しいと訴えました。その気持ちも分からないではないとして、法要の名称を「大久保利通公没140年法楽」から「西南之役官軍薩軍恩讐を越えての法要」に変更、また原口会長の講演のタイトルも「明治維新と大久保甲東」から「大河ドラマの西郷と大久保」に変えて行われました。

それと同じだとふと思ったのですが、江戸博の地元両国にある赤穂義士が討入りした吉良邸跡では、毎年、義士祭とは別に吉良祭を同時に行っています。町会の方に聞きまし

たら、吉良さんも義士から見れば憎つき相手かもしれないが、三河の領地では名君とされており、吉良の殿様と一緒に祭りしているとのこと、こういうのを知恵といいます。西郷と大久保の話も、両方が目くじらを立てずに妥協して法要が行われたのは良かったと思っています。

以前、大久保利通のお孫さんで歴史家の東大教授大久保利謙さんに直接お聞きしたのですが、西郷の敵だと見られるので郷里の鹿児島へ帰ると小さくなっていったといいます。こうした例はたくさんあります。長州出身だった放駒理事長(元大関陸奥)は現役時代、巡業で会津に行くと、戊辰戦争の恨みからか泊まる所がなかったので、わざわざ新潟に泊まりに行ったとご本人から伺いました。また、井伊大老暗殺事件で水戸と彦根も相当仲が悪く、水戸出身の横綱常陸山谷右衛門は巡業でも絶対に彦根には寄りつかないそうです。恩讐を越えてというのなかなか難しいようです。

高村光雲

西郷さんといえば、東京人である私の頭にまっ先に浮かぶのは、やはり上野の山に立つ西郷さんの銅像です。それにまつわる、因縁ばなしをお話したいと思います。

幕末江戸下谷の生まれ、長屋住まいの光坊(旧姓中島光蔵)が12歳になって丁稚奉公に出ることになりました。近所の床屋(床安)に行ったのですが、かつて同じ長屋にいたことがあり、江戸で名の知れた仏師になっていた高村東雲が弟子を探しているというので、床屋の安っさんは光坊を東雲先生の所へ面接に連れて行きました。江戸の床屋というのは町内の寄り合い所であり、遊び場であり、情報交換の場でもありました。床屋の主人はなんでも世話を焼いて、ここで話が決まるという風でした。お祭りの相談、婚礼の話、夫婦別れの悶着など、どんなことにも床屋の主人が主になって口を利いたものです。さて光坊は面接の結果、すぐに採用されます。安っさんがびっくりして聞いてみると、東雲先生いわく

「いやあ、履物の揃え方をみりゃあ、わかるよ。将来、ものになるかならないかは」。こうして東雲に弟子入りし、高村姓を継ぎ、光蔵の「光」と、東雲先生の「雲」をいただいたその人こそ彫刻家高村光雲です。高村光雲が『幕末維新懐古談』に書いています。光雲は死ぬまで安っさんの恩を忘れず、ご夫妻のご位牌を仏壇に入れて毎朝お参りをしていたそうです。

あの東日本大震災の津波の被害で大変だった時、2、3日後の新聞にこんな投稿がありました。「大津波 逃れし人の避難所に 百余の靴の整然と並ぶ」。僕はそれを読んですごく感動しました。大津波で逃げて逃げてごった返した避難所でたくさんの履物が整然と並んでいる。僕は、震災はぜったい復興できると確信しました。その後の原発の被害は100年もかかりますが、津波だけだったら復興できると思いました。日本人のDNAは危機的状況の時に本性が現れます。略奪もなく、人を押しつけて救援物資を取ろうともせず、整然と列に並ぶ日本人に自信を持ちました。

高村光雲は明治の近代彫刻の先駆となりました。明治20年(1887)、東京美術学校開設に際し、教授として彫刻科の基礎を築きました。代表作は「老猿」と「西郷隆盛像」です。

上野の西郷隆盛像

明治22年3月、大日本帝国憲法発布の大赦により、朝敵の汚名をそそがれ、新たに正三位が贈位。それとともに、西郷を顕彰するための銅像建設運動が起き、全国から2万5千人の募金が集まりました。制作を依頼されたのが、東京美術学校教授の高村光雲です。ちなみに犬は後藤貞行で、この人は皇居外苑の楠木正成像の乗った勇壮な馬も制作しています。

西郷は写真や肖像画がないので、弟の西郷従道をモデルにして作ったそうです。そして厳めしい軍服姿ではなく、兎狩りに行く野良着のような格好なので彼の人柄がにじみ出て親しみを感じます。高村光雲が下町の生まれですから、親しみの持てる上野の西郷さんの銅像が作れたのだと思います。

明治31年12月18日、上野に銅

像が建立され、除幕式が行われました。除幕式には、山縣有朋首相をはじめ、大山巖、勝海舟、故西郷隆盛の夫人が参列、盛大に行われました。その時、糸子夫人が言った言葉「うちの主人はこげん格好をしてなかった」は、今年の大河ドラマ「西郷どん」の第1回の冒頭シーンに出てきます。

「上野の西郷さん」と震災・戦災

慶応4年(1868)1月、戊辰戦争が始まり、西郷隆盛は東征大総督府参謀として勝海舟と会談、江戸城無血開城に成功します。それによって江戸を焼き討ちにしなかったことが江戸っ子の西郷人気となっていますが、その後も、東京の人々が危機的状況に陥った時、「上野の西郷さん」には何度も助けられています。



大正12年(1923)9月1日、午前11時58分、いわゆる関東大震災で大変な被害を被りました。直接の地震より火災によって多くの方が亡くなられました。私の両親から聞いた話ですが、逃げて行った場所は広い上野公園でした。その時、西郷さんの銅像に消息を知らせる紙がベタベタ貼られていたそうです。西郷さんの銅像は東京の市民にとっては大切な情報交換の場となっていました。

また昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲の時も人々は上野の山に行き、銅像の周辺には戦災孤児や家を失った人がたくさん集まっています。消息を尋ねる紙を貼っていた光景は実際に私も見えています。戦後も外地に抑留されて帰って来ない人を探す、いわゆる尋ね人の貼り紙が戦

後2、3年はあったと思います。

西郷星

それほど愛された西郷さんですから、人々の中に、西郷さんを生かしたいと思う気持ちがあります。明治10年の西南戦争で西郷が死去する前月頃から、赤い大きな星の中に軍服姿の西郷が描かれている絵入り新聞が刊行されました。西郷の死を予知した人々が、このままでは死なせたくないと思われ、星に乗り移らせたものと思われれます。9月24日の死後も、しばらくはこの星を「西郷星」と愛称し、この星を拝み、信心する者が少なくなかったそうです。この時、火星が地球に大接近、もっとも接近したのは9月3日。人々はその星が火星であることを知っていましたが、あえてこれを「西郷星」といって崇拝したのです。

「一枚の絵は空にかかる星(火星)を示し、その中心に西郷将軍がいる。将軍は反徒の大將だが、日本人は皆彼を敬愛している」とエドワード・モースは『日本その日その日』に記しています。

西郷生存のうわさ

西郷さんが生きてほしいという願望は、明治24年になってから、中正日報、東京日日新聞、郵便報知新聞、毎日新聞、都新聞、朝野新聞、東京朝日新聞など各紙に掲載されました。「人々は云へり、南洲翁死せず、城山を逃れて航して魯国に到り、久しく西伯亜(シベリア)に在りて兵務に従事せしが、今回魯国皇太子と共に来る」(4月3日『中正日報』)。西郷は城山で切腹せず、ロシアのシベリアに逃れて軍務に従事していたが、4月27日に来日するロシアの皇太子ニコライと一緒に日本に帰ってくるという、まことしやかなうわさです。

こうした生存説は3月31日から4月13日までの2週間にもわたりましたが、4月11日付の東京朝日新聞では、わざわざ香港通信者に問い合わせさせて西郷がロシア皇太子の船に同船していないことを確認した旨の記事を載せています。

非業の最期を遂げた彼への人々の哀惜の念と、敬愛の想いが投影されたうわさ話でした。

【記録】文・写真：広報部会・岡本 脩

制約された厳しい環境の中、定期総会開催

今年度の定期総会は、5月24日(木)、例年使っている江戸博のホールが閉鎖中のため、亀戸駅前の江東区亀戸文化センター3階カメラアホールで開催されました。JR総武線、東武亀戸線・亀戸駅北口を出てすぐの明治通りを渡ると、玄武と名付けられた亀の噴水があり、亀戸文化センターはその前です。噴水のそばにある説明文には、玄武とは“天の四方の方角をつかさどる神のうち、北の方角を守護するといわれる”と記されています。因みに、青龍(東)は東大島駅前広場、朱雀(南)は若洲公園、白虎(西)は豊洲2丁目に置かれている、との表示があります(いずれも江東区内)。

定刻の13時15分、毎年司会をお願いしている柏木さんのさわやかな声でスタートです。最初に早川会長の挨拶、そして江戸博から来賓として出席されている4人を代表して小林副館長よりご挨拶があり、平成30年度以降の江戸博の主な活動に関してお話をいただきました。特にアメリカや中国、それに韓国など海外との交流を深めながら、増大する海外からの観光客を館にどんどん入場してもらおうという姿勢を強く感じました。

議事に入る前に、議長団の選出があり、議長に広報部会の光田さん、副議長に事業部会の大澤さん、書記に同じく事業部会の待場さんと総務部会の寺田さんが選ばれました。光田議長の最初の仕事は、本日の出席者158人、委任状提出者609人、合計767人、よって年度末会員数(1548人)の3分の1の定足数(516人)を超えているので適正に開催されます、という宣言でした。

議事の最初は第1号議案、平成29年度事業報告ならびに収支決算報告です。まず概況報告が早川会長より述べられ、続いて事業部会報告を林部会長、広報部会報告を菊池部会長、総務部会報告を松原部会長、会計報告を内匠屋会計代表、館蔵古文書翻刻プロジェクトの報告を平川代表、

監査報告を小笠原監事代表がそれぞれ行いました。平成29年10月から6カ月の江戸博の休館が、若干の会員数減少や、各種事業への参加者数の減少、収入減のもとになりましたが、そう大きな影響を与えなかったことはよかったです、としみじみ思いました。この議案については意見要望など一切なく、満場の拍手で承認されました。

続く第2号議案は平成30年度事業計画案ならびに事業予算案です。1号議案同様、会長にはじまって、おのおの担当者が計画案と予算案を説明しました。江戸博の改修工事は引き続きホールなどが対象となって31年3月まで継続するので、かなりの制約を受けますが、各部会可能な限り会員との交流を続けていく考えが明確に打ち出されました。質問や要望がいくつかありました。会員の減少傾向が懸念される中、会員の増強をどう考えるかですが、各部会が行う事業をしっかりとやっていく中で、会員を増やしていきたい、とこれは会長から回答がありました。また、最近バスツアーが無いが、という質問には、経費の問題で本年も計画していません、と事業部会長から回答がありました。その後、2号議案の賛否が問われ、満場の拍手で承認されました。

第3号議案は役員の補充選任です。前任者が辞任したため、その補充として総務部会の秋広澄江さんを選任したいという内容で、これも、満場一致で承認されました。



全ての議案審議終了後、友の会全体に対しての要望・意見などを募ったところ、古文書講座の会場が民間業者の会議室になったため、これまでより高くなったが、参加費はできるだけ安くしてもらいたい、という要望、その他がありました。

総会終了後、15時から江戸博の竹内誠名誉館長による「西郷隆盛因縁ばなし」の講演がありました。

17時、場所を2階に移して開かれた会員交流会では、来賓、会員合わせて約100人が飲食・歓談し、交流を深めました。特に印象的だったのは、昨年大病を患った(とご本人の弁)竹内名誉館長が上記講演の後にもかかわらず参加され、しかも交流会が閉会するまで歓談の輪の中におられたことです。名誉館長の友の会への思い入れを感じながら、夕焼けが残る中、帰路につきました。

文・写真：広報部会・福島信一

新役員紹介(私のプロフィール)

あきひろ すみえ
秋広 澄江 (総務部会員)



この度、総務部会からの役員が体調不良のため辞任いたしましたので、その後を引き継ぐことになりました。「友の会」に入会して約8年、ズーッと総務部会で、会報『えど友』発送のお手伝いをさせていただいております。また、見学会、サークルでの歴史散策は勉強になりますし、健康のためにも歩ける限り参加したいと思っております。たくさんの方の皆様とお会いして楽しい時間を過ごしてまいりました。役員として少しでもお役に立てればと思っております。



会員からの投稿

鳥越川に江戸を偲ぶ

田端道宏

私は高校卒業まで、浅草橋に住んでいました。浅草橋三丁目のふとん店角に「甚内橋遺跡」の石碑が立っており、妙に記憶に残っています。最近、その地を訪れると石碑がまだあり(昭和55年再建)、碑文に「甚内橋」は鳥越川に架橋との記述を見て、まずは、川の名の由来となる鳥越神社へ向かいました。甚内橋遺跡碑の左岸を50mほど南へ行った蔵前橋通りに面した微高地に鳥越神社があります。

鳥越神社は社伝によると、白雉2年(651)の創建で白鳥大明神と称され、境内は小高い丘にあり、小島町にあった三味線堀と堀の北に続く姫ヶ池辺りまでを境内地とし、頗る広大でした。永承年間(1046-53)、奥州の乱(前九年の役)鎮定のため、この地を通った源頼義・義家父子は、名も知らぬ鳥が越えるのを見て、浅瀬を知り、大川(隅田川)を渡ったと伝えられ、源義家公は「これ白鳥大明神の御加護」と称え鳥越大明神(鳥越神社)の社号を奉られてより鳥越の地名が起ったと伝えられています。

鳥越川は、三味線堀から流れ出て大川(隅田川)に至る境内地を囲み流れていました。隅田川との合流地に元和6年(1620)に鳥越の丘を切り崩し、隅田川を埋立て造られたのが、扶持米(給料)備蓄の浅草御蔵であり、約3万7千坪の三方を堀で囲み、8本の舟入堀を作り、それに面して67棟の蔵が造られました。御米蔵を管理する蔵奉行などの役宅を敷地内に造成しましたが、それでも足りず鳥越神社北側の姫ヶ池を埋め立てて役

宅を造り、ご用地として没収され境内地は小さくなります。お米蔵の西側の町はその後蔵前と呼ばれ、札差商・米問屋・両替商など多くの店が並びます。

浅草御蔵の西側の鳥越川左岸には、天明2年(1782)に天文屋敷測量所が作られました。天文方という幕府の研究機関でした。かつてこの地の北側には鳥越の丘があり、南は川辺である低地へと続くこの場所は天文台用地として適し、地所内には高さ3丈(9.3m)の築土した台があり、約5.5m四方の天文台が築られました。葛飾北斎の描いた富嶽百景「鳥越の不二」の景色です。また、天文方御用としてここに属した伊能忠敬は全国各地の測量にあたり、「大日本沿海輿地全図」を編纂したのでした。

三味線堀・鳥越川は大正年間に埋め立てられ、その大部分が道路として確認できます。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

4月17日(火)月番鈴木紘一さんと3代目柳家権太楼「らくだ」「芝浜」と桂雀々「代書」のDVDを鑑賞した。参加者17人。

5月15日(火)上野鈴木本演芸場の5月中席昼の部(12:00~16:30)を鑑賞した。落語の他に、太神楽曲芸(翁屋社中)、漫才、キセル漫談、マジック、紙切りなど、バラエティーに富んだ構成で十分楽しむことができた。参加者15人。

◆藩史研究会

4月13日(金)座学と現地見学を初めて開催した。栗原藩は千葉県船橋市西船周辺にあたる栗原郷に4千石を与えられた成瀬正成から始まる。慶長5年(1600)、関ヶ原戦の軍功により3万4千石の大名になり栗原藩を立藩。元和2年(1616)家督を次男之成に譲り、自身は長男正虎とともに犬山城主・尾張藩付家老として義直に仕え明治維新まで続く。栗原藩を之成から継いだ3代之虎が寛永15年(1638)わずか5歳で死去。無嗣断絶により廃藩。38年の短い期間であった。後半 JR 西船橋駅へ移動

し、宝成寺(成瀬家菩提寺)、小栗原城址をメインにして周辺の神社仏閣を巡った。参加者9人。

5月11日(金)皆で調べる藩史の第6回。江戸時代初期に牧野信成が治めた石戸藩(埼玉県北本市)を取り上げた。信成が関ヶ原の役、大坂の役で軍功を挙げ、寛永10年(1633)、1万1千石で大名に列し、石戸藩が立藩。しかし、正保元年(1644)、加増により1万7千石で下総関宿に移封することで信成一代11年間の短命な石戸藩であった。参加者9人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

4月12日(木)米屋久右衛門の「日記」明治5年8月17日~10月6日。この年9月12日に東京・横浜間の鉄道が開業された。それにつき市中一般へ酒とするめが配られた。町内140軒に酒2升とするめ2枚、足りないのでするめ4枚買い足して配ったとある。この量でどのように配ったのだろうか。9月22日の皇后誕生日にも酒が配られている。参加者8人。

4月26日(木)「日記」明治5年10月7日~12月2日。参加者8人。

5月10日(木)「日記」明治7年1月1日~2月23日。この頃、荷車にも税がかけられるようになり、田中家でも小車1輛12銭5厘、第六車(中車)1輛37銭5厘、合せて50銭(半年分)納入。「日記」明治6年は欠参加者8人。

5月24日(木)「日記」明治7年2月24日~4月6日。参加者8人。

◆『江戸名所図会』輪読会

4月19日(木)船津恭子さんの担当。東叡山寛永寺の2回目。本坊の東にあった慈眼堂は、現在もほぼ同じ場所に開山堂として残っている。これは開山天海僧正(慈眼大師)と、天海が尊崇していた慈恵大師の像をお祀りしており、一般に「両大師」と呼ばれている。挿絵では開山堂の法華八講や両大師遷座の様子が描かれている。参加者18人。

5月17日(木)清水昌紘さんの担当。谷中から日暮里、いわゆる谷根千と呼ばれる一帯の寺社。図会に登場する寺社は廃寺となったお寺もあるが、

規模は縮小しているものの瑞林寺(現瑞輪寺)、感應寺(現天王寺)、本行寺などをはじめとして同じ場所にほぼ現存している。参加者16人。

◆日本の大道芸伝承会

4月11日(水)深川江戸資料館との共催「にほんの大道芸と物売り」出演のための稽古。「可愛がって」と「玉すだれ」などを行った。参加者2人。

5月3日(木・祝)深川江戸資料館と日本大道芸・大道芸の会の共催「にほんの大道芸と物売り」へ応援出演。「玉すだれ」や「女すたすた坊主」「絵解 地獄極楽」「琉球舞踊」などを披露した。お客さんは最終的に180名だった。参加者2人。

5月9日(水)通常の練習に戻る。発声練習の後「玉すだれ」や「物売り」「ろくま」などをした。参加者2人。

◆江戸を語る会

4月28日(土)山田興一さんが「古川柳に見る江戸風景」を発表した。柄井川柳が選者となり刊行された『俳風柳多留』の古川柳の名句を集めた『柳多留名句選』から75句程度を抽出し、当時の江戸の風習や情景、人々の暮らしなどを探った。後半は「川柳謎解き」と称して句の意味合いを皆で検討し、発表者のヒントで答えを推測した。江戸の人々の言葉遊びの醍醐味を味わった。参加者9人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

4月26日(木)東武野田線大宮公園駅に集合。歩いて寿能公園に向かった。ここは、太田道灌から3代あとの岩槻城主太田三楽齋資正の四男潮田資忠の居城・寿能城(岩槻城の支城)の址。資忠の墓を見学・参拝した。百体庚申社にお参りし、盆栽四季の家で休憩。大宮盆栽美術館を外から眺めた(休館日のため)後、漫画会館を見学した。道灌の軍配団扇が保存されているという埼玉県立歴史と民俗の博物館を見学し、解散した。参加者39人。

4月29日(日)1回目とほぼ同じコースを巡り、大宮盆栽美術館も見学できた。参加者33人。

5月27日(日)JR横浜線小机駅に集合、すぐ近くの雲松院に向かった。ここは、太田道灌に滅ぼされたあと

の小机城主・笠原氏が建てたお寺で、山門などが見どころ。参拝後、小机城址市民の森へ行き、丁寧な案内板を頼りに見学した。小机城は対岸の亀の甲山に滞陣した太田道灌が2カ月も包囲した後、ついに攻め落とししたというお城。次いで鶴見川流域センターへ行き、屋上から小机城址と亀の甲山を一望した。ユニークな新横浜ラーメン博物館を見学し、解散した。参加者24人。

5月31日(木)1回目とほぼ同じコースを巡った。参加者35人。

◆文士散歩

4月21日(土)「本郷・東大周辺を歩く」を実施。東京大学農学部に集合し、大学構内にあるハチ公と上野英三郎博士像を見る。竹下夢二美術館から横山大観記念館の庭を見て、旧岩崎邸庭園で建物内見学と休息をとる。森鷗外の『雁』の舞台となった無縁坂から再び東京大学構内に入り、夏目漱石ゆかりの三四郎池でも作品を思い出す機会となった。春日局菩提寺の麟祥院などを歩き解散した。参加者10人。

5月19日(土)「横浜港から元町辺りを歩く」を実施。JR関内駅に集合。横浜公園の日本庭園を散策した。みなと大通りを港に向かい歩き「ジャックの塔」の愛称で親しまれる横浜市開港記念会館、交差点を挟み堂々たる姿の通称「キングの塔」の神奈川県庁、そしてイスラム風な意匠が特徴的な「クイーンの塔」こと横浜税関を見る。山下公園では西洋理容発祥の地碑、赤い靴はいた女の子像、インド水塔、咲き誇るバラ園を通りマリンタワーへ。神奈川近代文学館で戦後文学、大衆文学、児童文学の資料を堪能し、バスで中華街へ戻り解散。参加者6人。

* * * *

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし、輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆B班「米屋田中家文書」

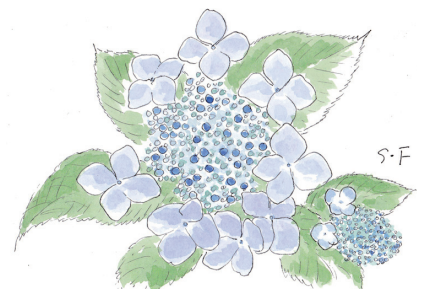
人宿の『米屋田中家文書』の延享4年(1747)の記録を読んでいる。今も昔も営業活動で一番効くのは接待のようで、この記録の中にはそこまでするのかという事例が書かれている。

お出入り先の大名の奥方が谷中の下屋敷に滞在されるので、御用達の米屋久右衛門に声がかかった。早速河東節の男芸者4人、藤間流の踊り子3人を召連れて席に参上。豪華な料理も提供して飲むや歌うや踊るやで御慰めをした。宴は夕方の5時ごろから始まり午前4時ごろまで、久右衛門が終わって帰る時に上野広小路で夜が明けたという。もちろん奥方をはじめ奥女中たちは大いに満足。だが掛かった費用も半端でない。例えば、男女芸者への礼金だけで合計3両3分。仮に1両=12万円としてもざっと45万円に相当する出費である。

友の会めも(開催日と人数)

平成30年4月～5月

◆役員会4月10日(火)14人。5月8日(火)15人。◆事業部会4月3日(火)20人。5月1日(火)19人。◆広報部会4月17日(火)12人。5月15日(火)12人。◆総務部会4月24日(火)21人。5月22日(火)12人。◆古文書講座 入門編：5月16日(水)午前88人・午後88人。初級編：5月23日(水)午前77人・午後64人。中級編：5月26日(土)午前40人・午後37人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト4月5日(木)A班8人。B班5人。4月19日(木)A班8人。B班4人。5月24日(木)A班5人。B班4人。



カット：福島信一さん

『えど友』100号記念投稿 「東京風景いまむかし」

昭和30年の上野動物園

佐藤美代子

私が生まれて初めて山口県の岩国から上京したのは、東京生まれの父方のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに来たのが初めてだったと記憶しています。旅行の最後は上野動物園、私は初めての旅行の疲れからか父のカメラのフレームの中にうまく入らなかったようです。あまり記憶がないので、昭和30年(1955)当時の上野動物園を調べてみました。



旧正門は昭和9年に完成しました。中央の4本の柱と大扉などは明治45年(1912)のものを移設したものです。昭和36年には料金を入れると開く最新の入り口に変まりました。旧正門は入り口を右折した外周に移動され、今は臨時に東門として使われることもあります。(下の写真)



上野動物園は昭和27年に開園70周年を迎え、これを記念してアフリカへ動物園職員を派遣しカバ、キリン、クロサイ、シマウマを購入し夏に到着しました。当時のキリンのつがいは「タカオ」と「みなみ」といい、昭和32年には「タカシ」が生まれています。昭和32年、西



園に造られたアフリカ生態園に引越え、今に至っています。

上野動物園前の上野こども遊園地は昭和21年に開園し、小さな子供たちには人気のミニ遊園地でした。しかし、平成28年8月31日、上野公園整備のため70

年目で閉園しました。

子供たちの遊びに行くところの定番はいつも上野動物園でしたが、平成29年にはパンダのシャンシャン(香香)が生まれ、ますますにぎやかに変わっていくのではないのでしょうか。

御茶ノ水界隈—昭和39年

西村英夫

昭和39年(1964)の思い出は卒業、就職、オリンピックと私の人生で色々あった年でした。そのころは東武東上線常盤台駅の近くに住んでいましたので、池袋へ出て地下鉄で御茶ノ水駅迄行っていました、東京医科歯科大学の病院とお堀に挟まれた狭い場所で地上に出て、メタンガスが湧き出た汚い堀にかかったお茶の水橋を渡って国鉄の駅を左に見て通っていました。ニコライ堂の屋根も遠くから見えていたように記憶しています。それだけ高いビルはなかったということです。

坂を下ったところが私の学校があった所で、太田姫稲荷が正門のはす向かいにあったのですが、その当時は全く気が付きませんでした。お茶の水は学校や病院が多く集まった地でした。淡路町界隈は羅紗屋さんの低層階のビル街になっていましたし、小川町から駿河台下は、今はスポーツ店が並んでいますが、当時は何か他の店があった気がします。神保町にかけては古本屋街で今と大きくは変わっていませんが、皆背の高いビルに変わっています。就職した会社も錦町から神田橋に寄った所で、これまた近くにありました。丁度新しいビルが建設される時期とも重なっていたので、そのころからあったビルは2、3にとどまる感じで、あとは低層階の建物や戦後できた家々に囲まれた場所でした。

当時は都電が走っていましたが、浅草橋まで乗ってアルバイト先に通った記憶があります。NHK朝の連続ドラマ「ひよっこ」にある赤坂の風景やその前の向島は41年ごろよりもっと前の気がします。皆さんの意見を聞きたいところです。

歴史の重み—日本工業倶楽部会館

山本 隆

新ビルの建築工事により、右側の日本工業倶楽部会館は、通常であれば壊され近代的なビルの中にひとつのテナントとして吸収されるはずでした。しかし、大正9年(1920)に建てられた登録有形文化財である日本工業倶楽部会館は、その歴史の重さから壊されずにその姿を留めています。また、近代的なビルは、保存・再現された日本工業倶楽部会館を守るように建っているのが面白い。



撮影年：平成29年度

場 所：千代田区丸の内1丁目3番地

交差点より撮影

館蔵古文書翻刻プロジェクトの『馬込家文書 旧記』が刊行

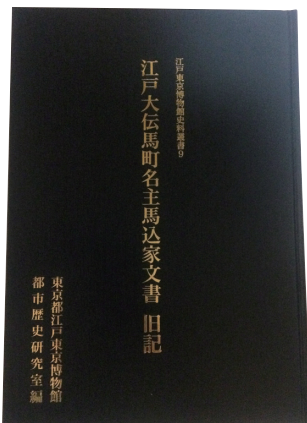
江戸東京博物館友の会館蔵古文書翻刻プロジェクトが翻刻した『馬込家文書 旧記』が、4月1日に江戸東京博物館から『江戸東京博物館史料叢書9 江戸大伝馬町名主馬込家文書 旧記』として刊行されました。

館蔵古文書翻刻プロジェクトは、友の会が自主事業として行った『町方書上』の翻刻が本編8巻、索引編1巻として刊行された後、友の会内部に蓄積された古文書翻刻の力を維持・活用するために江戸博と話し合い、両者の提携事業として、江戸博が所蔵する古文書の中から江戸博の学芸員の指導を受けて友の会会員が翻刻を行い、それを江戸博が『江戸博史料叢書』として刊行するという事業です。『馬込家文書 旧記』はその最初の刊行となるものです。

『馬込家文書 旧記』は、江戸時代に日本橋大伝馬町の名主を務めた馬込家に残った古文書です。馬込家の先祖は遠江国馬込村の郷土で、家康の幼少の頃から戦陣の道具や兵糧の運搬を担っていましたが、家康の江戸入りに従って江戸に移住しました。当主は代々馬込勘解由を名乗り、大伝馬町二丁目で大伝馬役・名主役を務め、草創名主の中でも筆頭的な存在でした。

旧記には、名主としての馬込家が関わった寛文5年(1665)から寛保元年(1741)に至る間の「訴訟」「生業」「上下水・橋」「家督」「土地」「金

銀銭」「家財書上」「祭礼」「火事」に関する事柄が記録されています。これを読むと江戸時代前期の名主の仕事や幕府の町政を具体的に知ることができます。



中でも少し変わった記事としては、享保4年(1719)の朝鮮通信使帰国に際して江戸から品川へ馬の行列で移動中、信使の小性1人が急病を発し、随行医師が日本人の童便(子供の小便)で薬を練り、飲ませたら完治したという記事。公儀が払い下げた土地を寺院が購入したが、その土地の中に町内鎮守の稲荷社があり、これをどう扱うか町内と寺院の間で取り決めた記事。この時は稲荷の地代は町が寺院の公役・町入用を負担する代わりに支払わず、賽銭は寺院が収納、と決められました。また、馬込勘解由が38歳の時に、腰痛を理由に辻駕籠の使用願を出して認められた

際の許可札や、さらに50歳の時にも腰痛で御定駕籠の使用許可願を出した記事、などがあります。

この翻刻は、町方書上から引き続いて担当した人に公募で新しく参加した人を加え、10人で行いました。江戸博所蔵のマイクロフィルムのコピーを基に、字を読んで翻刻していくのですが、ぼやけていたり汚損や虫喰いだったりで、その都度あてもないこうでもないと、1字確定するのに何分間も費やすことがありました。また字の翻刻だけでなく、見栄えの良い翻刻文にしていくためには、ルビや割注、テキストボックスの挿入や文字の均等割付けなど、パソコンの技術も必要で、これも試行錯誤で勉強しなければなりませんでした。お蔭でメンバーのパソコンの技能はだいぶ上達したのではないかと思います。

この『江戸大伝馬町名主馬込家文書 旧記』は江戸博1階のミュージアムショップで、取り寄せになります。興味のある方は是非お買い求めください。(館蔵古文書翻刻プロジェクト：)

平川亮一

翻刻メンバー

安部良男	上田洋子	小島みどり
早田晴子	鶴尾淳子	寺嶋滋夫
丹羽高利	平川亮一	三神千種
宮前一雄		

深川・木場・洲崎探訪



天気予報は午後から雨。申し込みよりも少し参加者は減ったようですが、集合場所の門前仲町駅前では一定数が集まると次々と出発し、深川公園で今日歩くコースの説明を受けました。

深川公園から深川不動堂

現在の深川公園は深川不動堂の隣にある公園、といったイメージですが、元来は富岡八幡宮とその別当永代寺の広大な敷地の一部でした。かつては桜とボタンの名所として知られた立派な庭園もありましたが、明治の廃仏毀釈で永代寺は廃寺となり、庭園を含む周辺の土地が公立の深川公園となりました。今は「富岡八幡宮別当永代寺跡」の碑が植え込みの脇にひっそりと立つばかりです。その隣には日清戦争の勝利を記念して建立された石造燈明台が立っています。全体に貼られた石板には歌舞伎役者や東京株式取引所、魚河岸、吉



▲石造燈明台

原・洲崎の遊郭や割烹料理屋などの奉納者の名が刻まれており、深川不動堂が幅広く信仰されたのがうかがえます。

深川不動堂は、元禄16年(1703)永代寺で成田山不動の出開帳をしたのがその起こりといわれています。以来、毎年出開帳が行われ、多くの江戸市民が参拝しました。永代寺が廃寺となった後は塔頭の吉祥院境内に成田山出張所を設け、明治11年(1878)には成田山不動堂の建設に着手、同14年に完成しました。不動堂参道にある現永代寺は、吉祥院がその名称を継いだものです。

参道の正面に見える入母屋造のお堂は日本堂です。成田山新勝寺釈迦堂を造った工匠、八木紋次郎が文久2年(1862)に建てた龍腹寺地藏堂(千葉県印旛郡)の建物が昭和26年

(1951)に移築されました。江東区内に現存する最古の木造建築です。



▲新本堂と旧本堂

その左側の、壁に模様のある特徴的な建物は、平成24年に完成した新本堂です。模様に見えるのは梵字で、この壁は「真言梵字壁」と呼ばれ、建物全体がお不動様のご真言に包まれた空間になっているとことです。予定では不動堂内の仏殿を30分くらいかけて見学するようになっていましたが、お天気が心配なため取りやめとなり、用意していただいた参拝記念のパンフレットと散華が全員に配られました。

富岡八幡宮

不動堂から斎場と庭球場の間を抜けると、通りの向こうが富岡八幡宮です。西鳥居の脇に「江戸最大の八幡さま」と大書された看板が見えます。境内はすっかり新緑に覆われ、朱色の社殿が鮮やかな対比を見せています。八幡宮境内には全部を見回れないくらい、たくさんの旧跡、碑石がありますが、まずは参拝後、本殿右奥にある横綱力士碑を見学。この地は貞享元年(1684)に初めて幕府から勧進大相撲の興行を許され、以後年2場所の相撲興行が定期的に行われた江戸勧進相撲発祥の地として知られています。横綱陣幕久五郎が引退後、寄付を集めて明治28年に歴代横綱の碑を建立し、現在も刻む場所を広げて継続しています。この他にも表参道東側に大関力士碑、巨人力士手形・足型碑、釈迦ヶ嶽等身碑など、相撲ファンには興味深い碑がいろいろあります。

八幡宮のお祭りは「江戸三大祭り」の一つとして有名です。一宮神輿は

豪華な装飾の日本最大の神輿として知られていますが、あまりの重さに渡御は一度行われただけで、参道の神輿庫に展示されています。隣にはその代わりとして渡御に出る二宮神輿が普段展示されていますが、あいにく修理中で倉はからっぽでした。参道の茶店前には平成13年に伊能忠敬像が建立されました。深川黒江町に住んでいた忠敬は測量の旅に出る前、富岡八幡宮を参拝して旅の無事を祈念したといえます。

八幡橋から木場公園

富岡八幡宮の東の堀跡に、赤い鉄橋が架かっています。楓川(中央区)に架けられた都内最古の鉄橋である弾正橋が昭和4年に移築され、八幡橋と改称されました。菊の紋章のついた橋としても有名です。八幡橋を



▲八幡橋

渡って少し行くと、富岡2丁目の路上に三十三間堂跡碑があります。京都の三十三間堂を模して浅草に創建された三十三間堂が、元禄11年(1698)この地に再建されました。説明を聞いている間にポツポツと雨が降り出し、傘をさしての見学です。緑の濃くなってきた木場親水公園を歩いて木場公園へ向かいます。公園から木場駅まで行き、さらに南下して洲崎弁天や、洲崎橋跡などが見学予定に入っていましたが、予想外の土砂降りとなり、木場駅で解散となりました。早くに出たグループでは、最後まで見学できた人たちもいたようです。参加者111人。

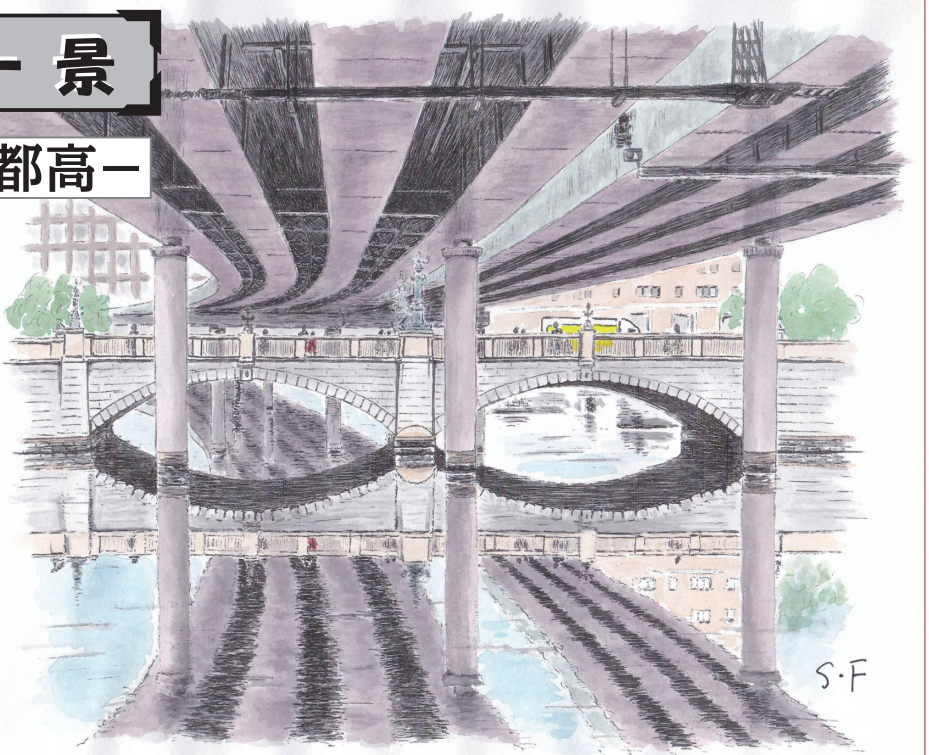
【取材】文・写真：広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

えと東京一景

(11) -日本橋と首都高-

徳川家康が慶長8年(1603)に架けた木造の太鼓橋が最初の日本橋である。その後、20回近くも架け替えられ、現在の石造二連アーチ型の日本橋は明治44年(1911)に建設された。橋の中央に「日本国道路元標」がはめ込まれており、平成11年に国の重要文化財に指定されている。その日本橋の真上に首都高が建設されたのは昭和38年(1963)のことである。新幹線開通と共に、高速道路建設は日本にとって昭和39年の東京オリンピックを成功させるための一大事業だった。5年という限られた時間、そして道路建設とその用地買収にかかる費用、技術者たちは既存の道路や川の上をルートにとることで工期の短縮をはかった。以前、NHK「プロジェクトX 挑戦者たち一首都高速 東京五輪への空中作戦」が放映された。中島みゆきの主題歌、田口トモロヲの独特の語りでご記憶の方も多いと思う。首都の大動脈、高速道路が果たしてきた役割はきわめて大きい。しかし近年になっていわゆる美観問題、お江戸日本橋の上に覆いかぶさる無粋な首都高はすこぶる評判が悪い。平成13年、江戸博友の会の第1回総会の記念講演「お江戸日本橋七ツ立ち」で、当時の竹内 誠館長が高速道路の地下化を



強く訴えておられた。建設から半世紀以上が経過、その老朽化に伴い、2020年のオリンピック・パラリンピック後に日本橋周辺の首都高を地下に移設させる動きが急速に現実味を帯びてきた。また圏央道、外環道、中央環状道路などが整備された今、都心のど真ん中に高速道路などいらないという意見もある。いずれにしても日本橋川のかつての水辺の景観がよみがえり、日本橋の真上に広重描く「東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景」のような朝焼けの空が見られる日が来ることは間違いなさそうである。

【取材】文：広報部会・岡本 脩/イラスト：同・福島信一



江戸博クリップ

思い出の餃子ステーション

事業企画課 展示事業係 学芸員 川口友子 (かわぐち ともこ)

昨年、JRの両国駅に期間限定で“餃子ステーション”が出現したのを皆様ご存知でしょうか。現在使用されていないホームを会場にした餃子レストランは、展示事業係で話題になっていました。そこで係員でこのイベントに行ってみよう! ということになり、8月の最終月曜に決行しました。

当日は江戸ゾーンの展示替えの日。係内で展示替え作業日に変な柄のTシャツ(おかしいTシャツ、略して「おかT」)を着ることがブームになっていたことから、私は宇都宮

で購入した「餃子Tシャツ」を着てこの日に挑みました。「定時に仕事を終わらせて餃子を食べに行く!!」という係員の熱い思いの賜物か、いつも以上に作業がスムーズに進んだのを覚えています。

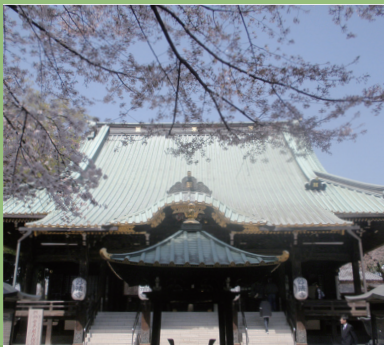
しかし、万全の体制で“餃子ステーション”に乗り込んだものの、到着してみると長蛇の列、待ち時間はなんと2時間以上!! 一刻も早く胃袋に餃子を取めたい私たちは、餃子を求めて夜の両国に繰り出しました。ところがどこも満員、餃子自体が売り切れの店もあったほど。お

腹を空かせた私たちは、とうとう餃子をあきらめ、せめて焼いたものを食べたいという意地で焼き鳥店へ。餃子柄のTシャツが店内で浮いていましたが、冷えたレモンサワーと焼き鳥はとても美味しかったです。

こうして係の交流を深めつつ、日々の業務に勤めております。江戸東京博物館の職員となって1年半。これからも精進していきますので、どうぞよろしくお願い致します。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

【阿佐谷神明宮から幡ヶ谷不動明王】



妙法寺の祖師堂

今回は杉並区の青梅街道周辺を中心に巡ります。図会に取り上げられている名所間がかなり離れているため、一部電車を使用しています。歩いたのは例年より早く桜吹雪となった3月末から4月初旬にかけてでした。

阿佐谷神明宮から桃園観音堂

JR中央線阿佐ヶ谷駅北口下車。東側の商店街を左折すると、阿佐谷神明宮の鳥居が正面に見えてきます。阿佐ヶ谷の別の場所から移されたもので、旧地は「お伊勢の森」と呼ばれています。参道を抜けると右手に立派な造りの神楽殿があり、秋の例大祭では「阿佐谷囃子」が奉納されるそうです。拝殿の先に入ることはできませんが、奥には小ぶりながらも堂々とした神明造りの本殿が見えます。また、神門の手前には猿田彦神社の祠がありますが、うっかりすると見落としてしまいそうです。

商店街に戻り線路沿いに進むと、ガードをくぐった先は桃園川緑道になっています。暗渠となっている桃園川の名は、近くの高門寺の境内に桃の樹が多かったことから、江戸初期に桃園と名付けられたことに由来します。享保年間(1716~36)に中野の御犬小屋跡(現在の中野駅辺り)に桃園が移されると、こちらは桃園の旧地と呼ばれるようになりました。図会では中野の桃園が取り上げられています。緑道を歩いていくと、満開の桜・花壇・動物のオブジェ・旧橋名の書かれた石柱などが次々に現れ、心地よい散歩を満喫できました。

旧西山谷橋のところを左折すると、正面方向に宿鳳山高門寺があります。本尊の観音菩薩像は「桃園観音」、寺は「桃園観音堂(俗に桃堂)」と呼ばれていました。くぐれない山門から緑陰の参道を通ると、唐破風屋根の本堂が正面にあります。戦災に遭ったため戦後の再建ですが、往時の姿を偲ばせます。しかし手前の石段に柵があるため、本尊を拝むことはできません。本堂左手の稲荷社には昇り龍と降り龍の迫力ある姿が彫られた双龍鳥居があり、大いに目を引きました。

日円山妙法寺から大宮八幡宮

緑道に戻って環七通りを右折、青梅街道を渡ってすぐ脇の荒玉水道道路に入ります。通り沿いには多くの寺がありますが、ひときわ広大なのが日円山妙法寺です。表通りから斜めの脇道に入ると、延々とコンクリート塀が続いています。正面に回って高樓の仁王門をくぐると、明和9年(1772)再建の祖師堂が入母屋造りの重厚な姿を見せています。



▲長谷川雪旦：堀の内妙法寺

階段を上がると右手の戸が開いていて、中に入ることができました。安置されている日蓮上人像は目黒区の法華寺(現門融寺)から移されたもので、「厄除け祖師」として江戸時代から賑わっていました。祖師堂の裏には本堂・書院・日朝堂・浄行堂・廿三夜堂などが配置され、挿絵に描かれた規模が実感できます。また仁王門隣にある和洋折衷様式の鉄門は明治11年(1878)製造で、重要文化財になっています。

表通りに戻り善福寺川を渡って直進すると、やがて右手に源頼義が康平6年(1063)に創建したと伝わる

大宮八幡宮の大鳥居が見えてきます。鳥居の先には両側に林のある長い参道が続いています。中門をくぐると左右に天然記念物の大イチョウが立ち、正面の本殿が風格のある姿を見せています。ここから右手の北門を出ると眼下に善福寺川と和田堀公園が広がり、神社が高台にあることがよく分かります。門脇の「大宮遺跡」説明板によれば、この付近で弥生時代末期の方形周溝墓が発見され、土器・勾玉・ガラス玉などが出土したそうです。

井口山慈宏寺から幡ヶ谷不動明王

南側の方南通りから西永福駅に出て、井の頭線で富士見ヶ丘駅下車。北口の通りをしばらく直進して五日市街道を渡ると、交差点角の春日神社の隣に井口山慈宏寺があります。境内はさほど広くなく、本堂と祖師堂は戦後に建造された新しい建物です。本尊の日蓮上人立像は「荒布の祖師」と呼ばれ、日蓮の弟子日朗が妙法寺の日蓮像とともに2体作成したうちの1体です。本堂に安置されていま

すが、普段は見ることができないそうです。

富士見ヶ丘駅に戻り、井の頭線と京王線を乗り継いで初台駅で下車。新国立劇場の脇を通って向かいの通りを右に進むと、左手に光明山莊嚴寺の総門が見えます。参道右手には「幡ヶ谷不動尊」として知られる不動堂があり、「幡ヶ谷不動明王」が安置されています。参道正面の山門をくぐった

所にある常夜燈は、山手通りと甲州街道の交差点付近から移されたものです。嘉永3年(1850)建立で、台石には莊嚴寺・十二社熊野神社・大宮八幡宮・井之頭弁財天への道のりが刻まれており、道しるべとして使用されていたようです。また墓地へ続く通路脇には、芭蕉の句碑「暮れおそき 四谷過ぎけり 紙草履」があり、この句を本日の結びとしました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

江戸城と町割り 模型で江戸を体感する

「実物大の日本橋を渡って、江戸時代にタイムスリップ！」は『江戸東京博物館常設展示総合図録』の、「江戸城と町割り」コーナーの最初に書いてある言葉です。

常設展示室の入り口となるこのコーナーは実物大で復元した日本橋から始まります。幅約8mの日本橋を渡ると、正面に江戸初期、寛永年間(1624～44)の日本橋北詰付近の町人地縮尺1/30の模型があり、その中の日本橋は幅約27cmです。隣には同じく縮尺1/30の寛永の大名屋敷と江戸城本丸の大広間・松の廊下・白書院の模型があり、建物の大きさを比べてみるができます。



▲幕末の江戸城－本丸・二丸御殿－

リニューアルにあたり、このコーナーに江戸城に関する模型が新設されました。直径約6mの円形の中に縮尺1/200で作成した幕末の江戸城－本丸・二丸御殿－(模型)です。本丸御殿を中心に復元されています。もしも他の模型と同じように1/30で御殿模型を作った場合、直径40mにもなってしまうとのことです。このことから江戸城の巨大さがうかがえます。

日本橋が初めて架けられたのは慶長8年(1603)といわれています。橋の規模は全長約51m、幅約8mですがここでは北側半分を復元しました。架け替えは20回ぐらい行われ、復元にあたっては、文化3年(1806)の架け替え記録や当時の絵画をもとにしました。唐銅製の擬宝珠のうち2本は現存する「万治元戊戌年」の銘入りの実物(日本橋1丁目黒江屋所蔵)をもとにしています。橋脚部

分は主に椴材^{けやき}を使用し、麤子打^{かのこうち}(木材の表皮を手斧でまだらに削り取る)で仕上げられています。床板は檜を使っていますが年を経るとだんだんと隙間が空いてくるので隙間から埃が落ちないように修理しているそうです。

寛永の大名屋敷(模型)は江戸城本丸大手門の前に建てられた越前福井藩主・松平伊予守忠昌(徳川家康の次男結城秀康の次男)の上屋敷です。広大な敷地には桃山風の豪壮な建物が建っていましたが、明暦の大火(明暦3年・1657)により焼失し、以後このような華麗な大名屋敷は姿を消しました。復元にあたっては「伊予殿屋敷指図」(岡山大学池田家文庫所蔵)、「甲良向念覚書」(東京都立中央図書館所蔵)、「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館所蔵)などをもとにしています。しかし建物の形が分からない部分は復元をしていません。「江戸図屏風」の精密な複製が展示されることが多いので屏風の中で華麗に装飾された諸建築や大名屋敷の景観を模型とともに体感してください。

寛永の町人地(模型)は大名屋敷松



▲屋根の上の天水壺(寛永の町人地)

平忠昌の上屋敷とほぼ同じ面積が復元されています。大名屋敷の建物の大きさと一戸一戸の町人の家の狭さを実感してください。復元にあたっては「武州豊嶋郡江戸庄図」(国立国会図書館所蔵)、「江戸図屏風」、「江戸名所図屏風」(出光美術館所蔵)などをもとにしています。模型の通りには多くの人形も歩いていて見るだけでも楽しいのですが、建物に

も注目してみましょう。江戸初期、裏通りの小さな家の屋根は板葺きで石が載せられています。屋根の上には天水桶ではなくまだ壺が置かれています。町の入り口には城郭風の3階建ての建物が建てられていました。屏風の複製の展示もあるので江戸の人々の生活を垣間見てください。



▲江戸城本丸 大広間・松の廊下・白書院

江戸城本丸の大広間・松の廊下・白書院も1/30の縮尺です。建物は弘化2年(1845)の再建時の図面をもとに、襖や壁・天井などの絵は弘化年間(1844～48)に作られた「江戸城本丸等障壁画絵様」(東京国立博物館所蔵)によります。断面の形の模型なので、天井の中の構造や大広間の上・中・下段の段差もよく分かります。

1/200の江戸城・本丸御殿の松の廊下の場所や大きさを確かめてから1/30の松の廊下、通路に展示されている実物大の松の廊下の襖絵と順に観ていきましょう。より一層、江戸城の大きさを実感できます。明暦の大火で焼失した後、天守は造られず天守台のみでしたが、幕末の江戸城－本丸・二丸御殿－(模型)では幕末にはなかった天守が作られています。

様々な模型を交互に比較して江戸を体感する、これがこのコーナーの楽しみ方の一つになっています。

参考資料：『江戸東京博物館 常設展示総合図録』、『江戸東京博物館 常設展示図録(模型編)』模型で見る江戸東京

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子

催事案内

古文書講座

◆9月から第2期を開講

9月から下記日程で開講します。受講は自動継続ではありません。改めてお申し込みください。また申込はがきは1講座ごととして、**申込の受付は7月末まで**です。

◆入門編 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)

●開催日：9/5(水)、10/3(水)、11/14(水)

◆初級編 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)

●開催日：9/12(水)、10/17(水)、11/21(水)

◆中級編

●講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)

●開催日：9/22(土)、10/20(土)、11/17(土)

●時間：各講座とも

午前の講座は10時30分～12時30分

午後の講座は14時～16時

(注意)午前の講座か、午後の講座かの希望を明記

●会場：各講座とも飯田橋の

新陽ビル4階「リロの会議室 会議室A」

●参加費：各講座とも全3回2,400円(初回一括払い)

◆30年度第1期の残日程

入門編7/4(水)、初級編7/11(水)、中級編7/21(土)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

見学会

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(6)

◆天保年間に出版された『江戸名所図会』は、江戸の風景を画家の長谷川雪旦が精密に描写した挿絵を満載したガイドブックです。挿絵に描かれた場所は、今では名残・痕跡などあまり残ってはいませんが、現代の風景と重ね合わせながら江戸の町を歩きましょう。今回は「鎧之渡」、「山王祭」、「永田馬場山王御旅所」、「茅場町薬師堂」、「伊雑大神宮」、「三橋」、「新川酒問屋」、「新川大神宮」と題された場所を巡ります。歩行距離は約3kmで所要時間は2時間を予定しています。解散場所は都営浅草線「宝町」駅の近く。

●開催日：9月9日(日)小雨決行、受付後順次出発

●受付開始：12時45分 受付終了：13時15分 時間厳守

●集合場所：東京メトロ東西線、日比谷線「茅場町」駅の9番出口地上

●申込締切：8月30日(木)必着

●定員：150人 同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)

●参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第14回(平成30年度 第1回)

「中野区立歴史民俗資料館」を訪ねる

◆「中野区立歴史民俗資料館」は名誉都民である山崎喜作氏から寄贈された2600m²の土地に建設され、平成元年に開館。館内は1・2階に常設展示室、企画展示室、特別展示室、調査研究室、研修室などを備えています。屋外には江戸時代の建造物である山崎家の茶室や庭園があります。

●開催日：8月17日(金)13時30分～14時 受付

●会場：中野区立歴史民俗資料館(中野区江古田4-3-4)

●学習：14時～15時30分 館の沿革・特徴などについてのお話や主な展示品の解説を伺いながら1階から2階の展示室を見学して、その後は自由に見学、そして流れ解散です。

●交通アクセス：西武新宿線「沼袋」駅北口より徒歩8分。都営地下鉄大江戸線「新江古田」駅より徒歩15分。JR「中野」駅北口より①京王バス(中92系統練馬駅行)か②関東バス(中41系統江古田駅行)に乘車。どちらもバス停「江古田二丁目」下車、徒歩2分(受講票に略地図を掲載)

●申込締切：7月30日(月)必着

●定員：40人(会員のみ) 定員を超えた場合は抽選

●参加費：500円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

企画展のご案内

●企画展 「発掘された日本列島2018 新発見考古速報」

会期：6月2日(土)～7月22日(日)

休館日：7月2日(月)、9日(月)、17日(火)

会場：常設展示室 5F企画展示室

会期残り僅か
お見逃しなく!

催事のお申込方法

◆普通はがき(62円)に、①催事名(略名可)・開催日
②会員番号(必須) ③氏名(同伴者連記)

を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。

◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館「友の会事務局」

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*いずれも**申込多数の場合は抽選となる場合があります。**

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日が金曜日(10時～12時、13時～17時)**をお願いします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報<えど友>第104号

平成30年7月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

E-Mail: edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：早川良躬(会長) 編集長：中村貞子

岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、小出雅右、横島利明、福田 徹

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910